

【二】本文について、設問に答えよ。

せめて例のチョウを見たいと、ぼくは中に入った。そしてすぐに、エーミールが収集をしまっている二つの大きな箱を手を取った。どちらの箱にも見つからなかったが、やがて、そのチョウはまだ展翅板に載っているかもしれないと思いついた。はたしてそこにあった。とび色のビロードの羽を細長い紙きれに張り伸ばされて、ヤマムギは展翅板に留められていた。ぼくはその上にかがんで、毛の生えた赤茶色の触角や、優雅で、果てしなくビミヨウな色をした羽の縁や、下羽の内側の縁にある細い羊毛のような毛などを、残らず間近から眺めた。あいにく、あの有名な斑点だけは見られなかった。細長い紙きれの下になっていたのだ。

胸をどきどきさせながら、ぼくは紙きれを取りのけたい①誘惑に負けて、針を抜いた。すると、四つの大きな不思議な斑点が、挿絵のよりはずっと美しく、ずっとすばらしく、ぼくを見つめた。それを見ると、この宝を手に入れたいという逆らいがたい欲望を感じて、ぼくは生まれて初めて盗みを犯した。ぼくはピンをそっと引っぱった。チョウはもう乾いていたので、形は崩れなかった。ぼくはそれをてのひらに載せて、エーミールの部屋から持ち出した。その時、さしずめぼくは、大きな満足感のほか何も感じていなかった。

チョウを右手に隠して、ぼくは階段を下りた。その時だ。下の方から誰かぼくの方に上がってくるのが聞こえた。ぼくは突然、自分は盗みをした、下劣なやつだということを知った。同時に、見つかりはしないかという恐ろしい不安に襲われて、ぼくは本能的に、獲物を隠していた手を、上着のポケットに突っ込んだ。ゆっくりとぼくは歩き続けたが、大それた恥ずべきことをしたという、冷たい気持ちに震えていた。上がってきたお手伝いさんと、びくびくしながらすれ違ってから、ぼくは胸をどきどきさせ、額に汗をかき、落ち着きを失い、自分自身におびえながら、家の入り口に立ち止まった。

すぐにぼくは、このチョウを持っていることはできない、持っているはならない、もとに戻して、できるならなにもなかったようにしておかねばならない、と悟った。そこで、人に出くわして見つかりはしないか、ということに極度に恐れながらも、急いで引き返し、階段を駆け上がり、一分の後にはまたエーミールの部屋の中に立っていた。ぼくはポケットから手を出し、チョウを机の上に置いた。それをよく見ないうちに、ぼくはもうどんな②不幸が起こったかということを知った。そして泣かんばかりだった。ヤマムギは潰れてしまったのだ。前羽が一つと触角が一本なくなっていた。ちぎれた羽を用心深くポケットから引き出すとすると、羽はばらばらになっていて、繕うことなんか、もう思いもよらなかった。盗みをしたという気持ちより、自分が潰れてしまった美しい珍しいチョウを見ているほうが、ぼくの心を苦しめた。(ア) ビミヨウなどび色がかかった羽の粉が、自分の指にくっついているのを、ぼくは見た。また、ばらばらになった羽がそこに転がっているのを見た。③それをすっかりもとどおりにすることができたら、ぼくはどんな持ち物でも楽しみでも、喜んで投げ出したろう。

悲しい気持ちでぼくは家に帰り、夕方までうちの小さい庭の中に腰かけていたが、ついに一切を母にうち明ける勇気を起こした。母は驚き悲しんだが、すでにこの告白が、どんな罰を忍ぶことより、ぼくに与ってつらいことだったということを感じたらしかった。

「おまえは、エーミールのところに行かねばなりません。」と母はきっぱりと言った。「そして、自分でそう言わなくてはなりません。それよりほかに、どうしようもありません。おまえの持っている物のうちから、どれかを埋め合わせにより抜いてもらうように、申し出るのです。そして許してもらうように頼まねばなりません。」

あの【一】でなくて、他の友達だったら、すぐにそうする気になれただろう。彼がぼくの言うことをわかってくれないし、おそらく全然信じようともしないだろうということ、ぼくは前もって、はっきり感じていた。かれこれ夜になってしまったが、

④ ぼくは出かける気になれなかった。母はぼくが中庭にいるのを見つけて、「今日のうちでなければなり